

[解説]

ヨーロッパに於ける情報システム学会の動向

松本 秀之

要約 2006年6月にスウェーデンのゴーセンブルグに於いて「大いなる挑戦」を中心テーマとして第14回欧州情報システム学会(ECIS2006)が開催された。本稿は、このECIS2006での議論を振り返りながら、日本の情報システム研究者の方々に対してヨーロッパに於ける情報システム学の動向を報告する。

Abstract The 14th European Conference on Information Systems (ECIS) was held at the School of Business, Economics and Law, IT University of Gothenburg, Sweden between 12th and 14th June 2006. This paper reports the movement of the information systems academy in Europe based on the experience of attending the conference to the Japanese information systems researchers.

1 一般的な記述スタイル

本年2006年6月、スウェーデン・ゴーセンブルグに於いて「大いなる挑戦」を中心テーマに掲げて、第14回欧州情報システム学会が開催された^[1]。情報システム学研究者の一人として、この会議から学んだヨーロッパに於ける情報システム学の動向を日本の同じ領域の研究者の方々々に即時性を持って御報告申し上げることが極めて重要な事であると感じ、本稿を編む事とした。本稿は①本年度のPh.D. コンソーティアム^[2]の活動状況、②本年度ECIS2006本会議^[3]で議論された主なポイント、そして③来年度ECIS2007^[4]の予定を参考として、日本の情報システム学研究者の方々へのサジェスションという3つの側面からレポートを行なう。

2 欧州情報システム学会 : Ph.D. コンソーティアム

本会議の前段階として恒例のPh.D. コンソーティアムが、6月9日から11日までの3日間、ゴーセンブルグ市街から車で約1時間の場所に位置する、ノーサンド・バードハス^[4]という小さな港町で開催された。事前審査を受けた約20名の博士課程の研究者の卵の一人として、私も参加をさせて頂いた。3つのグループに分かれ、各研究者が約1時間に亘りそれぞれの研究テーマ、研究の重要性、研究手法をプレゼンテーションし、それに対し他の参加者が様々な観点から問題提起を行なうシステムである。

米国ジョージア州立大学の Baskerville R. 教授、英国ワービック大学の Currie W. 教授、イタリア・ミラノ・カソリック大学の De Marco M. 教授、ドイツ・ミュンヘン・テクノロジー大学の Krcmar H. 教授、フランス・ナント大学の Rowe F. 教授、デンマーク・コペンハーゲン IT 大学の Pries-Heje J. 教授の各氏が、それぞれ2人ずつ組み3つのグループの担当となり、情報システム学研究の経験に基づき様々な角度からアドバイスを与えるという形式で行なわれた。加えて、Ph.D. コンソーティアムの全般に亘るアドミニストレーションを地元

Movement of the European Information Systems Academy

Hideyuki Matsumoto

University of London, Birkbeck College,
School of Computer Science and Information Systems

[解説] 2006年6月17日受付

© 情報システム学会

表 1. 欧州情報システム学会におけるストリームの 2006 年度と 2007 年度の比較表

	ECIS 2006	ECIS 2007
類似するストリーム	Communities and New Forms of Organizations	IS and Transformation
	eBusiness	E-business
	Enterprise Systes	Organisational & Enterprise Engineering
	eGovernment	E-work
	Living in, and Coping with, the society	
	Grand Challenges of System Development	IS Development
	Human Computer Interaction	
	Information and Knowledge Management	Information and Knowledge Management
	IT in Tourism and Travel	Tourism, Culture and IS
	Mobile Communication, Telematics and Ubiquitous Computing	Mobile & Emerging Technologies for IS
	Philosophy and Epistemology of IS Research	IS Research Methodologies
	Strategic Management of IS and IT	IS/IT Management
	Open Source, Open Access and the Open Information Society	IS Security & Risk
消滅するストリーム	Human Computer Interaction	
	IS and Organizational Change	
	New Technologies, Innovation and Infrastructure Development	
新しく組織化されるストリーム		Logistics, Manufacturing and IS
		Financial Services and IS
		Public Sector and IS
		Information Industry and IS

ゴーセンブルグ IT 大学で教鞭を執る Stenmark D. 助教授が担当した。

Baskerville R. 教授は、この Ph.D.コンソーシアムの開催の辞で以下の 3 点を強調した。①批判は人に対してではなくアイデアに対してされるものであることを忘れてはいけない、②このアイデアに対する批判は価値創造の源泉となる、そして③このコンソーシアムで作られたネットワークは今後の情報システム学の発展に、多大なる貢献を齎すことは間違いない、と。この 3 日間の白熱した議論と構築されたネットワークは今後の情報システム学の新しい萌芽となる事を感じた。

3 欧州情報システム学会：本会議

本会議はゴーセンブルグIT大学⁶⁾の経営経

済法律スクール⁶⁾で行なわれた。開催に伴い、ゴーセンブルグIT大学のPessi K. 教授は、① ECIS2006 の参加者は約 400 名にまで達した事、②参加国はヨーロッパのみならず、アメリカ、オーストラリア、ニュージーランド、シンガポールと多岐に亘る事。②提出された 600 超の研究から査読をパスした約 200 のペーパーの発表が 16 のストリーム（表 1）に分かれて行われる事を紹介した。

続いて地元スウェーデン・ボルボ社CIO兼ボルボ情報テクノロジー社長であるNilsson U. 氏から、ボルボ社が 2000 年以降推し進めてきた情報システムのグローバル・スタンダード化⁷⁾を披露した。また、本会議のテーマである「大いなる挑戦」を議論するパネルに於いては多くの意見が飛び交ったものの、「情報システムの

研究者達が協力して、例えば研究手法は何が適しているのか、研究課題としては何が重要なのかを議論する。それが一定の成果を見る事が出来たならば、次に他の領域に行って更に議論する。この繰り返しによって、情報システム学の各『大いなる挑戦』は遂行されていくのではなからうか。」というコンセンサスが得られたと認識している。

16の各ストリームに於いても前述の通り約200の研究成果の発表が行なわれ、私は指導教授のデービッド・W・ウィルソン博士と共に、米国3、英国2、スイス1、日本2、合計8つの投資銀行に於けるグローバル情報システム戦略比較文化研究⁸⁾を発表した。本会議ECIS2006のクロージング・セッションでは、スイスのセント・ガレンに於いて"Relevant rigour - rigorous relevance"をテーマに掲げて開催されるECIS2007の紹介が行なわれた⁹⁾。表1で示すように2007年度に組織化されるストリームは2006年度とは少々異なっている。

4 終わりに

本年度ECIS2006の参加者の一人として以下の3つの点が印象に残っている。先ず第一に、ファンダメンタルな部分でECISは、産学一体を志向しているという点である。第二に、これは他のAIS系の国際学会にも当て嵌まる事だと思うが、ECISは「ヨーロッパ」の情報システム学会とは言うものの、アメリカやオーストラリアなど他地域からの参加者が数多くいたという点である。第三に、情報システム研究者の多くの方々が日本的な文明・文化、日本という国、日本人という人種に興味を持っているという点である。ここで本稿の締め括りとして、第三番目の点、つまり日本に対する興味という点についてもう少し論じたい。

例えば、ECIS2006に於いて、オーストラリア・ウィーン経済経営大学のHaghirian P. and Madlberger M.は、携帯電話に入ってくる広告に対する反応の比較をオーストラリアと日本の学生を対象として調査¹⁰⁾し発表を行なっているように、日本というのは情報システム研究の観点から興味深い国であり文化なのだと思ふ。

Toyota, Nissan, Hondaといった自動車メーカー、Sony, Panasonic, Canon, Toshiba, Fujitsuといったコンピューターメーカー、更にMitsubishi, Mitsui, Sumitomoといった銀行あるいは商社のグローバル・マーケットでの活躍は、多くが認識するところである。これらの日本企業はグローバル化し、日本ブランドはビジネスの世界では重要な位置を占めている。遠く離れた地域で活動する情報システム研究者も、日本のIT技術、IT企業、更にはIT文化に触れる機会が多い。

然し乍、日本人のECIS2006参加者は私一人であり、「日本人の情報システム学研究者の方々は少なく感じるのはなぜなのか。」という休憩時に何度か聞かれた質問に対しては答えに窮してしまった。一方で、海外の情報システム学研究者の方々は「来るものは拒まない」というのが、ここ数年間AIS系の国際会議に5回ほど参加させて頂いた経験からの率直な印象である。ということから、日本の情報システム学会の方々が、更にICIS, PACIS, ECIS, AMCIS, ACISなどの国際会議に益々参加することを期待されているのかも知れない。

伝統的な学術領域に比べて比較的新しい分野である情報システム学は、まだまだ未開拓の領域だと思ふ。「大いなる挑戦」と題した本年度のECISのパネル・セッションでは、米国ケネディ大統領がアポロ計画を発表した時のスピーチを参考として、「さて、それでは我々情報システム学の大いなる挑戦とは何か。」を議題に討論を行なった。米国ヒューストンのNASAから打ち上げられるスペース・シャトルには、日本人宇宙飛行士が搭乗することがしばしばある。情報システム学の世界に於いても多くの日本人の情報システム学研究者が、このグローバルな連携の輪の中に入って行っただとしても何の違和感も無い筈である。

表1で記したように来年度のECIS2007は、① Logistics, Manufacturing and IS, ② Financial Services and IS, ③ Public Sector and IS, ④ Information Industry and ISというある一定の産業に焦点を当てたストリームが新たに4つ組織化される。来年度の

ECIS2007 は IT 先進国の日本の状況、あるいはグローバルに展開する日本の IT 技術など様々な観点から日本の研究者が研究成果を発表する絶好のチャンスと捉える事は出来ないだろうか。

参考文献

- [1] ECIS 2006: Web Site, <http://www.ecis2006.se>
- [2] ECIS 2006: Doctoral Consortium Web Site, http://www.ecis2006.se/11_doctoralconsortium/doctoralconsortium.html
- [3] ECIS 2006: Web Site, Final Program, <http://www.ecis2006.se/program-final.pdf>
- [4] ECIS 2006: Doctoral Consortium Web Site, Venue <http://www.nosundsvardshus.se/>
- [5] ECIS 2006: IT University of Gothenburg http://www.ecis2006.se/07_ituniversitybg/ituniv.html
- [6] ECIS 2006: Conference Information <http://www.ecis2006.se/Conferenceinformation2-web.pdf>
- [7] Nilsson U. (2006), "From the Local IT Department towards the Global IT Service Provider", the conference proceedings of the European Conference on Information Systems (ECIS), 14th Annual Conference, Gothenburg, Sweden, June 2006
- [8] Matsumoto H. and Wilson D.W. (2006), "Activators and Inhibitors of Successful Global IS in the Strategic Management Cycle of the Multinational Investment Banks", the conference proceedings of the European Conference on Information Systems (ECIS), 14th Annual Conference, Gothenburg, Sweden, June 2006
- [9] ECIS 2007 Web Site, <http://www.ecis2007.ch>
- [10] Haghirian P. and Madlberger M. (2006), "A Cross-Cultural Analysis of Perceptions of Mobile Advertising a Survey among Austrian and Japanese Students", the conference proceedings of the European Conference on Information Systems (ECIS), 14th Annual Conference, Gothenburg, Sweden, June 2006

著者略歴

1962 年生まれ。外資系投資銀行東京支店及びシンガポール支店勤務を経て、現在、日系証券会社ロンドン現地法人テクノロジー部ディレクター。1985 年、慶應義塾大学経済学部卒業。1988 年、アイルランド国立大学情報経営学部修士課程修了。2002 年より英国ロンドン大学にて「多国籍投資銀行のグローバル情報システム戦略比較文化」を研究中。Ph.D. Candidate。